

## 田代よいとこーその34ー子安森と中津川の流れ2ー

以下は、半原在住の琉球大学名誉教授・小島櫻禮（よしゆき）氏（民俗学）の論文「良弁僧正ゆかりの如意輪観音像～半原田代の寺と丹沢の行者道～」(『神奈川ふだん記』(機関誌第82号やまゆり 2016年6月)をもとにしています。

半原に清雲寺という臨済宗の寺があります。明治から大正へかけての住職だった徳源和尚の話として、次のようなものが伝わっています。

清雲寺には如意輪観音（にょいりんかんのん）がまつられています。古来、行基（ぎょうき：奈良時代の高僧）の作として伝えられてきたこの像は、徳源師によると、良弁（ろうべん）の作であるということです。良弁については、半原の染矢家の先祖・染屋太郎時忠の子どもであるということの前号の「田代よいとこ」で紹介しましたが、子どもがなかった時忠が如意輪観音に祈願して授かったのが、この良弁だといわれています。

良弁はある夜夢を見ました。如意輪観音が姿を現して、こう言いました。「川上から大木が来るから註1、それで我が像を刻め」と。そこで良弁は、中津川のほとり、田代河原に庵（いおり）を結び、断食して修行しました。そして満願の前夜、川の水が大いに増し、多くの流木がやってきました。その中に霊木とおぼしき大木があり、庵の前で止まりました。これこそ昨夜夢に現れた如意輪観音のお告げであると思った良弁が日夜怠ることなく刻んだのが、この如意輪観音像であるということです。

ところでこの像は、もと清滝寺（清瀧寺とも書く）にあったが、後に清雲寺に移りました。清滝寺についても前号で書きましたが、明治時代に廃寺となった真言宗の寺で、かつては大山の信仰が一時衰えたとき、この寺がその信仰を引き継いだといわれるくらい由緒ある寺でした。開山は良弁です。半原の染矢氏は、良弁の開いたこの清滝寺の信仰を守るために、鎌倉時代に鎌倉から移住してきたと伝えています。

良弁が如意輪観音の申し子であるという話は、『相模大山縁起』という古文書にも出ています。如意輪観音は子どもを授けてくれる仏様であり、神道でいうなら子安神となります。また、良弁の母（染屋時忠の妻）が子安神の加護を受けたという伝えもあります。ここに、如意輪観音＝子安神＝子安森と一続きの物語が生まれました。

子安森のいわれについてはもう一つあります。戦国の頃、田代城主・内藤三郎兵衛秀勝の娘が、故あって中津川の淵に身を投げました。秀勝はそれを不憫に思い、「わが子安かれ」とねんごろに菩提（ぼだい）を弔ったことから、のちに入水の地を人々が「子安の森」と呼ぶようになったというものです。

### 【付記】

前号で、移設した子安明神を写真で紹介しました。かつて祠の中には「謹修 子安大神御霊 奉祀 大正十三年九月二十七日 村社社掌 甲賀金蔵謹誌」と書かれた神札が納められていたそうですが、徳源老師の話では、如意輪観音がまつられていた半原の観音堂では、毎年9月19日を縁日として、盛大におまつりをしていたそうです。実際、関東地方には、子安神を信仰する既婚婦人たちが19日に子安講（こやすこう）という集まりを行い、これを「十九夜講」と呼んでいるところもあります。

<註1>田代地区では、昔から大水の後流れ着いた川木を建築材や燃料用の薪にしてきました。焼ける前の田代小の校舎の一部にも立派な川木が使われていたそうです。この伝説からも、中津川の恵を受けていた古人の姿が浮かんできますね。

### <参考資料>

- 『あいかわの地名ー田代地区ー』（愛川町文化財報告書 第18集 愛川町文化財調査会編 平成2年3月）
- 『愛川町の小祠・小堂』（愛川町文化財報告書第8集 愛川町文化財保護委員会編 昭和48年3月）
- 「良弁僧正ゆかりの如意輪観音像～半原田代の寺と丹沢の行者道～」(『神奈川ふだん記』(機関誌第82号やまゆり 2016年6月))
- 『細野区百年史』（愛川町細野区 平成16年10月） <取材協力>小島櫻禮さん



清雲寺如意輪観音像